

# ティ・アーモ -Ti amo-

著者／流遠亜沙

---

ASSAULT-SYSTEM 文庫

わたしの名前はベアトリーチェ。

Z S 学園中等部に通う二年生の女の子。

勉強も運動もそこそただけど、毎日楽しく暮らしてます！

……学園ラブコメものの導入っぽい？

えへへ。だって、これは学園ラブコメだもん。それっぽく始めたいじゃない？

もうタオ姉がわたし達の事は説明してくれてるけど、わたしの視点での『Z S』は今回が初めてだから、改めて説明するね。

わたしの名前は……もう言ったっけ。去年の春から中学生になりました。ランドセルも卒業して、セーラー服を着るとちよつとだけお姉さん気分。ちなみに、高等部はブレザーだから、学生のうちに両方着られるよ。わたしはセーラー服の方が可愛いと思うけど、ブレザーも大人っぽくて憧れる。ねえ、どっちが好き？

わたしにはお姉ちゃんが二人います。二人とも高校生で、わたしは三姉妹の末っ子。今は通学の関係で、皆で親戚の家に居候してるんだ。

そんな生活ももうすぐ一年。季節は冬の真只中。

わたしは寒いのが苦手だから、特に朝は炬燵から出たくない。

でも、今朝はそうも言ってもらえない。今日は二月十四日……そう、バレンタインだから。

「……ヤミ姉、寒いね」

わたしは、わたしと同じように炬燵に籠って湯呑でお茶を啜ってる女の子に声をかけた。

「……そっだな」

Z S 学園指定のブレザーを着た女の子は、初対面の人が聞いたら不機嫌なのかと勘違いしそうな低いトーンで返事をした。

この人がわたしの一人目のお姉ちゃんで、名前はヤミヒメ。高等部の二年生。雰囲気や口調だけじゃなくて、名前も古風。長い黒髪をポニーテールにして、橙色の瞳は少し吊り目がちだけど、怖い訳じゃない。普段は優しく凍とした雰囲気。剣道とか弓道とか、古風な部活が似合いそう。やってないけど。

「……吹雪で休校になったりしないかな」

「……ここは雪国ではない。雪など降らん」

「……そっだよね」

会話のテンポが妙にぎくしゃくしてるけど、別に仲が悪いとか、寒さでしゃべる気力がないとかじゃなくて、お互いに警戒してるというか、牽制しあってるというか。要は今、わたしとヤミ姉は緊張状態にある。

「……ベアトリーチェ」

「……なに？」

「……お茶、飲むか？」

「……ううん、要らない」

「……そうか」

「……うん」

なんかヤミ姉、思春期の息子とコミュニケーションを取ろうとがんばってる父親みたい。そう考えると、ちよつとだけヤミ姉が可愛く思える。実際には、全然そんなんじゃないんだけど。

「——焼きましたよ」

妙な緊張感が漂うリビングに、そんな空気などお構いなしに、静かだけど良く通る声と共に、お皿が置かれる音がした。わたしとヤミ姉が入っている炬燵こたつのテーブル部分に置かれた皿には、それぞれ、トーストとスクランブルエッグと生ハムが盛られている。

「タオ姉ねえ、ジャムぬ——」

「それくらい自分で塗ってください。私はメイドではないんですよ」

わたしのお願いを最後まで言わず、お皿を運んできた女の子は、すぐにキッチンに戻ってしまった。

「ベアトリーチェ、横着してタオエンの手間を増やすな」

ヤミ姉はバターをトーストに塗りながら、わたしを窺たしなめるように言った。

今のがわたしの二人目のお姉ちゃん、名前はタオエン。高等部の一年生。セミロングの銀髪は緩くウェーブがかかっていて、瞳の色は金色。基本的に無表情だけど、無駄口を利かないだけで、口数が少ない訳じゃない。学業優秀・家事万能で、人当たりも良かったりするから、学校での評判は良いみたい。高等部の事は、あまり知らないけど。

「はい」

仕方なく物分かりの良い妹っぽく返事をしてから、わたしも自分のトーストにジャムを塗る。今日はマーメイドにしようかな。

「お兄ちゃん、まだ起きてこないね」

「そうだな。いつもの事だが」

食事を始めた事で、わたしとヤミ姉の緊張状態がちよつとだけ解けた。

「抜け駆けしちゃう駄目だからね」

「……ほう。真つ先に抜け駆けしようとした泥棒猫の台詞せりふとは思えない」

わたしの言葉に、ヤミ姉は一瞬だけ頬ほおをひくつかせた。

「騙し騙されるのがこの世の理<sup>ことわり</sup>。律儀に約束を守って命令を待つてるだけの忠犬じゃ、ご主人様に愛想を尽かされちゃうよ？」

わたしが悪びれずにそう言うのと、ヤミ姉はトーストをかじるのをやめて、ケチャップのチューブに手を伸ばした。スクランブルエッグにかけるのかな？ わたしは気にせず、マーレードジャムを塗ったトーストを口に運んだ。

——ぶじゆ。

チューブからペースト状のものが絞り出される音と共に、眼前のマーレードジャムたつぷりのトーストが赤く染まった。隣を見れば、ヤミ姉がケチャップを逆手に持って、わたしの目線より少し上に掲げていた。

「……………」

「……………」

わたしは無言で、視線だけをトーストとケチャップの間で往復させる。

「何するの!？ ヤミ姉のせいで食べられなくなったじゃない!」

「お前が減らず口を叩くからだろう!」

「口で言ったんだから、口で返せばいいじゃない!」

「口論でお前に勝てるとは思っていない。お前は私が殴ったら、殴り返すのか?」

そう言われるとこつちが弱い。ヤミ姉は護身術の心得があるし、単純に体格差で勝てない。もちろん、ヤミ姉は暴力に訴えたりはしないから、口喧嘩<sup>げんか</sup>や挑発を仕掛けたわたしの方が大人げないのは判ってる。

「だからって——」

「だから何もありません。チーズをかけて焼き直せばピザっぽくなるかもしれません。それで二人で食べてください」

わたしがヤミ姉に食い下がろうとしたところで、コーヒーを運んできたタオ姉がケチャップ塗れのトーストを皿<sup>さら</sup>ごと攫<sup>さら</sup>っていった。トーストとはいえ、自分がつくったものを台無しにされて腹が立ってるはずなのに、タオ姉は無表情のままだった。そう考えると、自然に頭が冷えた。

「…………ごめんね、ヤミ姉」

「…………いや、私が大人げなかったのだ」

「…………ピザトースト、下にマーレードが塗ってあるから甘くないかな」

「…………我慢して食べるしかないな。文句を言って夕飯抜きは御免だ」

タオ姉は無表情だから、見様によっては不機嫌に見える。けど、怒る事は滅多になくて、それだけに、怒ると本気で怖い。それに家事をほぼ一人でやってるから、タオ姉の怒りを買うと、死活問題に発展する。ご飯が食べられない。洗濯物が溜まっていく。家の中も荒れていく……。

「……うん、黙って食べる」

忌々しい記憶が蘇えって鳥肌が立った。

人間は過去の過ちから学んでいく。悲劇を繰り返しちゃいけない。

「——出来ましたよ。割りとそれっぽく見えます……どうしたんです？」

自分の分のコーヒーカップを片手に、もう片方の手でピザトースト（っぽい、元ママレードジャム・コーティング済みトースト）を載せた皿を炬燵テーブルに置いた。確かにピザトーストっぽく見える。香りも食欲を誘う。本当は甘いのが食べたい気分だったけど、怖いから言わない。

「ヤミ姉、ナイフそっちにあるから半分に切って」

「ん、判った」

ヤミ姉がナイフに手を伸ばそうとした時——

——がちや。

リビングのドアが開いて、男の子が現れた。少し長めの黒髪をして、表情だけじゃなくて、全身で『眠い』みたいな雰囲気を発散させている。

「あ！ おはよう、お兄ちゃ——」

と、わたしの言葉が終わる前に、空気を切り裂くような剛速球で、『何か』が飛んで行った。その『何か』は男の子の側頭部に直撃——する寸前に、本人が受け止めていた。

「……つぶねえな!!? 殺す気か!?!」

かなり驚いたんだと思う。その男の子なら、普段は絶対に出さないような声量とテンションだったから。無理もないけど……。

「大丈夫、お兄ちゃん？」

わたしは咄嗟に炬燵から出て、男の子に駆け寄って声をかけた。痛いであろう手を握る風を装って密着するのも忘れない。

「——なっ、ベアトリーチェ!」

ヤミ姉の『出遅れた』みたいな表情が、背後から聞こえた呻き声から想像出来た。

「ああ、大した事はないが……何のつもりだ、タオエン？」

「すみません。うっかり、手が滑ってしまいました」

謝罪の言葉を告げるタオ姉はいつも通りの無表情で、悪びれている様子は少しもない。

「お前はうっかりで起きぬけの人間に剛速球を投げるのか？」

「謝っているじゃないですか。歳下の女の子のうっかりを、笑って許す度量もないんですね。本当に小さい男です——死ねばいいのに」

「直撃したら本当に死んでたかもしれないがな」

「ええ、そのつもりで投げましたから」

「うっかりじゃねえじゃねえか！」

「なんという巧みな誘導尋問……油断すると私の生理周期まで知られてしまいそうです。最低ですね——気持ち悪い」

「お前が勝手にしゃべったんだろが。だいたい、お前の生理周期なんぞ知りたくもない」

「聞きましたか、姉さん。私の生理周期など知った事じゃない——つまり『危険日にレイプして妊娠しようが構うものか、この肉便器』と言っているも同然ですよ。さあ、ベアトリーチェも退避してください。汚らわしい種馬野郎に孕はらまされますよ」

そう無表情にまくし立てて、タオ姉はわたしをお兄ちゃんから引きはがした。

……これが普段は無表情で、誰に対しても丁寧口調なタオ姉の一面。なんというか、ほんのごく一部の相手に対してだけ毒舌というか、辛辣というか。

そして、そのごく一部の相手というのがお兄ちゃん……この男の子。

名前はアサト。この家の現在の主。親戚といっても三親等以上離れてて、実の兄妹じゃない。そう呼んでるのはわたしだけで、ヤミ姉に至っては同じ高等部に通うクラスメイトだったりする。つまり、学校でも近くにいた訳で……ずるい。

ちなみに、お兄ちゃん——アサトの両親は海外に住んでるから、この家にはいない。つまり、この家は歳頃の男女が同居してるラブコメ状態で、タオ姉じゃないけど『間違い』が起ころ可能性はゼロじゃない。

ようやくここまで説明出来たけど、大丈夫？ ちゃんと判ってもらえてるかな？

……うん、大丈夫そうだね。

わたしが説明してる間にタオ姉とお兄ちゃんの口論——というか、一方的にタオ姉が毒を吐いてるだけだけど——は収まったみたい。

あ、ピザトースト（つばい、元マーレードジャム・コーティング済みトースト）が載った皿が、お兄ちゃんの席に置かれてる。ヤミ姉とは『貝になれ』『了解』というアイコンタクトが一瞬で成立した。さすが姉妹。以心伝心だね。……ちよっとだけ心が痛むけど。

タオ姉はタオ姉で、涼しい顔をしてコーヒーを飲んでる。準備や片付けがあるから、朝

食だけはタオ姉はわたし達より先に済ませて。わたしも早く食べないと遅刻しちゃう。

ちやつかり新しいトーストをタオ姉に焼いてもらって、マーメイドジャムを塗る。甘みが口いっぱい広がって幸せな気分になる。お兄ちゃんはピザトースト（以下略）を咀嚼しながら、不思議そうな顔をしてる。ピザソースなのに甘いと思ってるんだろうな……ごめんね、お兄ちゃん。

「ん？ どうした」

罪悪感からチラチラ見てたら、お兄ちゃんと目が合ってしまった。

「えっと……美味しい？ そのピザトースト」

本当はピザトースト（以下略）なんだけど。

「それが、なんか妙に——」

「私のお手製ピザトーストに何か不満でも？」

お兄ちゃんの言葉を遮って、タオ姉が無表情なんだけど不愉快な雰囲気を漂わせて言った。

「……いや、ピザソースがちよっと」

「私が選んだソースが……何か？」

「……とても美味しいです」

「お世辞は結構ですので、早く食べてしまってください」

こう答えざるを得ないお兄ちゃんをヘタレと呼ぶ人もいるかもしれない。でも、わたしはこの家に住んでるから知ってる。お兄ちゃんは間違ってる。

これが我が家の絶対的な階級制度。家事を取り仕切るタオ姉に勝てる者はいない。たとえ家主と居候の関係であっても、この真理は覆らない。

「——ああ、忘れていました。アサトさん」

「……なんだ？ 残さず食ってるぞ」

「それは当然です。そうではなく、先ほど投げつけた物ですが」

「ん？ この小箱みたいなのか」

お兄ちゃんはなんとなく炬燵テーブルの端に置いておいたのだろう白い小箱を見た。それは野球ボールがちょうど一つ収まりそうなサイズで、手で握って投げるには理想的なサイズだ。だからって、人に向けて全力投球していい理由にはならないけど。

「……今、投げつけたって言ったよな？」

「失礼、言い間違えました。うっかり手元が狂ってあなたの方に落としてしまった物ですが」

「……ああ、これがなんだ？」

タオ姉に言い返すだけ無駄だという事はお兄ちゃんも判ってる。無駄な事はしない主義だから、これ以上『うっかり』には言及しない。見様によっては『飼い慣らされてる』ように映るんだろうな。

「中身はチョコレートです。良かったですね、バレンタインに女の子からチョコがもらえて」

『！』

タオ姉の言葉にわたしとヤミ姉がぴくんと反応する。口火は切ってくれた。あとは――

「はい、お兄ちゃん。わたしからもチョコレートだよ」

「私のもあるから、その……受け取ってほしい」

示し合わせたようにわたしとヤミ姉は同時に、それぞれの言葉でお兄ちゃんに小箱を渡す。タオ姉が投げつけたのと同じサイズで、私のは茶色、ヤミ姉のは黒。中身は言葉通りチョコレート。昨日のうちにタオ姉から教わって、ヤミ姉と二人で作った。お兄ちゃんに渡すチョコレートだから、本当は教えたくないんだろうけど、わたし達の頼みを断れないタオ姉はやっぱ優しい。

わたしとヤミ姉だけだと、どちらが先に渡すかで喧嘩けんかになるし、流れがあった方が渡しやすいから、タオ姉にも渡してもらった。一応、家に住まわせてもらってるお礼も兼ねてって言うってたけど、タオ姉は本当は渡したくないんだろうな。

「そうか、今日はバレンタインか」

お兄ちゃんは世間のイベントとかに興味がないから、本気で気付いてなかったんだと思う。気付いていても気付いてなくても、男の子はどうしようもないけど。

「アサト、私のは出来れば最初に食べてくれ……その、一番、見映えが悪いのだ。最後に見られると、余計にひどく感じられてしまう。あ、味は問題ないぞ！ うむ、味はな！」

そんな風にナチュラルに想いを伝えられるヤミ姉は、可愛いと思う。

わたしには出来ない。わたしの照れ隠しは完璧だから、本気で照れてないように見えるどころか、あざとく見えてしまうと思うから。それが照れ隠しなんだって、きっと気付いてもらえない。

「美味けりや、別に見た目なんてどうでもいい」

「そ、そうか……ならば良かった」

お兄ちゃんの隣に並んでも、ヤミ姉は違和感がない。年齢的な事もあると思うけど、そんな表面的な事が理由じゃない。お兄ちゃんというヤミ姉は本当に楽しそうで、お兄ちゃんもヤミ姉と話してる時はすごく自然に見える。タオ姉と同じで無表情だけど、他の人……わたしとヤオ姉と話してる時とは、やっぱり違う。



お兄ちゃんとヤミ姉。

二人はきつとお似合いで、そこに割って入れる隙間はないんだと思う。

どれだけわたしがお兄ちゃんを好きでも、お兄ちゃんも同じだけわたしを好きになつてくれる訳じゃない。そんなのは当たり前。

それでも……。

「——ベアトリーチェ、どうした？」

「え？ あ……」

嫌な事を考えてるうちに、思考の海に沈んでみたい。気付けば、お兄ちゃんの顔が目の前にあった。無表情なんだけど、わたしを心配してくれてる。気遣ってくれてる時の目だって判った。

「えっと……あ、わたし先に出るね。今日、日直だったの思い出したから！」

ここで思いきり取り乱して部屋を出たりしたら、お兄ちゃんは追いかけてくれるんだらうな。

でも、わたしはヤミ姉じゃないから。こんな時でも取り乱したりしない——出来ない。すごく冷静に自分の感情を制御出来てしまう。心配させまいと、迷惑をかけまいと。

……こういうのが可愛くないんだらうな。

結局、何事もなかったようにリビングを出て、自分の部屋に着いてしまった。振り返っても、お兄ちゃんは追いかけてきてくれたりは——

「……………なんで？」

自室のドアの前でささやかな願いを込めて振り返ると、階段を上りきって、廊下をこちら側に曲がったばかりのお兄ちゃんと目が合った。

「お前の体調が悪そうだから追いかけて確かめろって、タオエンが」

「タオ姉……」

タオ姉はわたしの気持ちもヤミ姉の気持ちも知ってる。本当は嫌だけど、わたし達のために協力してくれる。ヤミ姉みたいに判り易くないけど、いつも気遣って、助けてくれる。こういう、どちらか一方に肩入れする事は普段はしないけど、今回はわたしのために信条<sup>ボリシー</sup>を曲げてくれたのかもしれない。

でもそれは、このままだとわたしがヤミ姉に勝てないと思ってるから。だから手助けしてくれてるんだと思う。

……こんな風に考えちゃうのも、可愛くない原因なんだらうな。

「気分でも悪いのか？ 少し、つらそうだぞ」

お兄ちゃんがすごく近い。わたしを心配してくれてる。嬉しい。

「だいじょ——」

『大丈夫』じゃない。

「へい——」

『平気』なんかじゃない。

「……………」

あれ？ 言葉が上手く出てこない……どうしたんだろう？

なんか、頭も上手く働かないや。

……ちよつとだけ、素直になってもいいのかな。

考えるのはやめよう。せつかくタオ姉がくれたチャンスだし。

これで嫌われてもいいや。

「あ、あのね……お兄ちゃん」

スカートのポケットに忍ばせておいたチョコレートを包みから出して、端はしをくわえた。

「？」

お兄ちゃんはわたしの意図が読めなくて、きよとんとしてる。普段は子供らしくないから、そういう顔をされると、お兄ちゃんも普通の高校生なんだなって思う。

わたしはチョコをくわえたまま上目遣いでお兄ちゃんに迫る。

「んー」

チョコをくわえてるから、聞き取れる言葉は出せない。でも、気持ちを通じれば、言葉にしなくても伝わるはず。

「あ……口移しで受け取れって言いたいのか？」

——伝わった!?

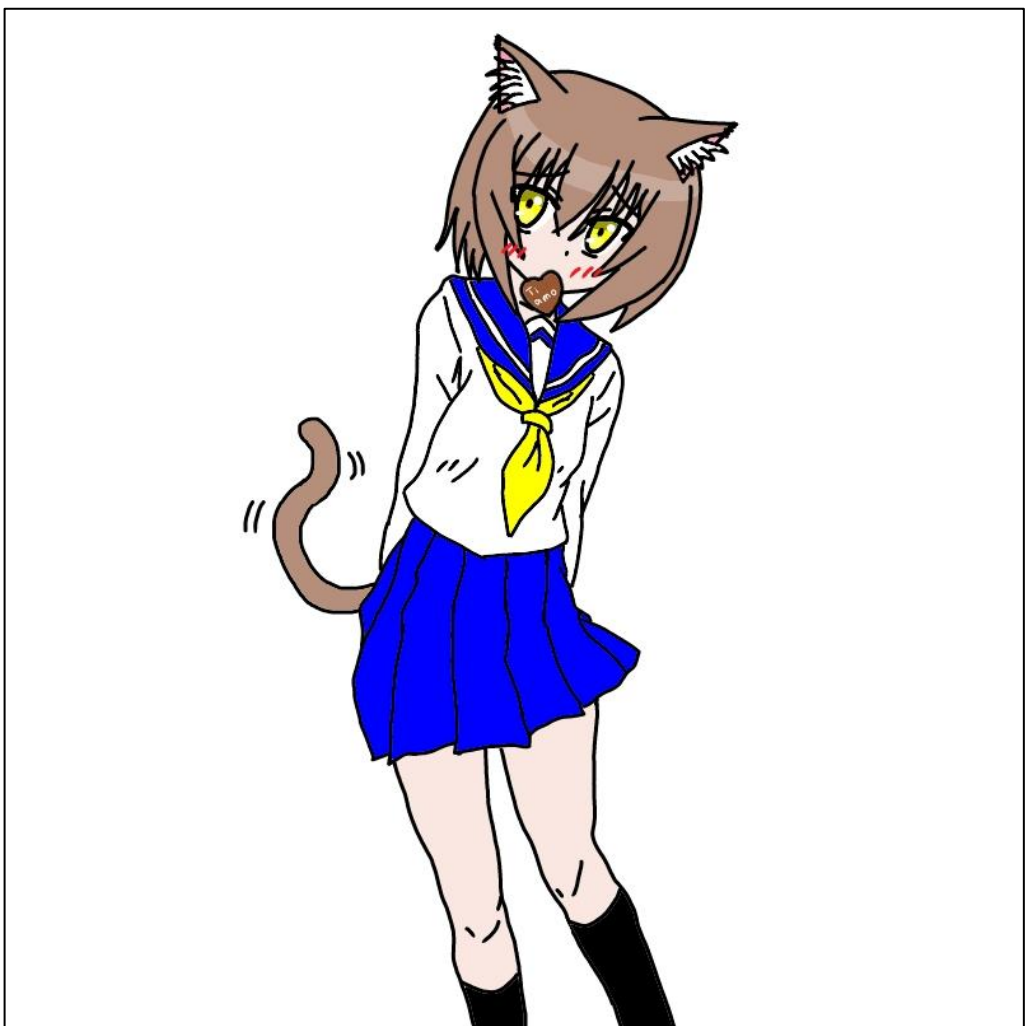
「んんー！」

『そう』という意味を込めてお兄ちゃんに肉薄する。これ以上の接近はばを阻むように、わたしの両肩にお兄ちゃんの両手が触れる。ちよつとドキツとする。

見様によっては、お兄ちゃんの方がわたしに迫っているように見えるかもしれない。

見上げれば、お兄ちゃんの顔もちよつと赤い——気がする。

わたしは両手を自分の背後で組んで、上半身全部で首を傾げるようなポーズを取る。前に、雑誌か何かでモデルさんがやってたポーズ。『小悪魔になるための方法』みたいな特集だっと思っ。あざといのは判ってる。これで幻滅されてもいい。わたしにはこういうやり方しか出来ないから、これで駄目ならどうしようもないし。



だから、思いっきりあざとく迫ってみる事にした。  
ねえ、可愛い？ それとも、こんな感じの方が好き？  
お兄ちゃんが可愛いって思ってくれるなら、わたしはどんな事でもするよ？  
だから、少しでもいい。  
わたしの事も好きになってほしいな。

この朝の事ははっきり覚えてない。わたしは本当に熱があつたみたいで、熱があつたらおかしい思考回路になっていたのか、考えすぎて知恵熱が出てしまったのか、自分でも判らない。ただ、この日からちょっとだけ、お兄ちゃんがわたしを見る目が変わった気がする。上手く言えないけど、わたしはそれが嫌じゃない。わたしを女の子として意識してくれてると思うと、ちょっとだけ恥ずかしいけど、嬉しいから。

——  
ティ・アーモ  
大好きだよ、お兄ちゃん。

ティ・アーモ -Ti amo- (下)

## あとがき

どうも、流遠亜沙です。

ツイエス  
ZS 〈ツイドチック・ストラテジー〉『ティ・アーモ Tri amo』をお届け致します。

タオエン視点、アサト視点に続き、今回はベアトリーチェ視点です。ベアトリーチェのテーマは『あざとく可愛い』なので、あざとさを意識して書いてみました。ただ、彼女のアざとさには理由がある。それを今回は書いてみました。元々は過去作品の登場人物で、本来は健気なキャラだったのを思い出しました。

二番目の看板娘・ベアトリーチェの事を好きになってもらえると嬉しいです。

さてバレンタインネタな訳ですが、十四日という事は、明日は小説の定期更新日(と自分の中で決めていている)です。前回の『ツイやみ』のあとがきで書いたように、やはり十五日の更新は無理です。これを書いている現状では、一文字も書いていません。だって先月は番外編もあったし、今回はイラストも描いてたし……。

それでは謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。次の『ZS』のイベントは四月の新サイト一周年ですかね。もしくは夏の浴衣か。だって三月のひな祭りレベルでイベントを拾ってたら、キリがないので。では、また次の作品でお会い出来ればと思います。

——あざとい女の子には、あざとい理由がある。

2015/2/10 流遠亜沙

アンケートに答える

『ZS ツイドチック・ストラテジー』ページに戻る